

ベトナムからの労働力輸出に関する研究

—韓国への出稼ぎを事例に—

平成 19 年度入学

派遣先国：ベトナム社会主義共和国

財津 信

キーワード：ベトナム, 韓国, 労働力輸出, 出稼ぎ, 移動

対象とする問題の概要

ベトナム戦争後、長らく西側世界に門戸を閉ざしていたベトナムは、1986 年に刷新（ドイモイ）政策を開始することによって、グローバル化の潮流に巻き込まれることとなった。そのような中、国内の貧困問題解決と外貨獲得のために、国策として労働者を送り出しているが、東南アジアにおいては、ベトナムは労働力輸出に関して後発の国家であり、先発の国家に対するアドバンテージとして、より安い賃金での契約を受け入れざるを得なくなっている。

一方、1980 年代の民主化を経て、産業構造が高度化した韓国では、1990 年代から単純労働者が不足するようになった。韓国は、東南アジアから多くの労働者を受け入れており、その数は年々増えている。

このような両者の需要と供給が合致し、ベトナムから韓国への労働力移動は、アジアにおいて目立った流れとなっているにもかかわらず、その実態の詳細は明らかではない。

研究目的

年々その数を増すベトナムから韓国への労働力輸出であるが、2006 年まで行われていた産業技術研修制では、韓国内において、多くの人権にかかわる問題が発生したことが明らかになっている。そこで、それらに対する反省から、産業技術研修制を雇用許可制に改める動きが起こり、2007 年から本格的に運用されるようになった。けれども、雇用許可制が始まってからも、ベトナム内において、雇用許可制について周知徹底されていないなど、いくつかの問題が存在することが指摘されている。

しかしながら、ベトナムから韓国への労働力輸出に関する研究はまだ始まったばかりで、先行研究は韓国側にわずかにあるのみである。そこで、ベトナム側、つまり、送り出し側の視点をふまえて、労働力輸出の構造を明らかにするとともに、この大きな人の流れが、両国社会にどのような影響を与えているのか、明らかにしたい。

フィールドワークから得られた知見について

ここでは、ふたつのことを述べたいと思う。ひとつは、現在のベトナムにおいて、「出稼ぎ」が「豊かさ」を実現する重要な手段のひとつとして位置づけられていることであり、もうひとつは、その出稼ぎ先として、韓国の位置がやはり非常に高いということである。

まず、ベトナムの経済発展は著しく、特別な能力や技能を身につけている人々にとっては、国内でも高収入を得ることは困難ではないが、学歴も技能もコネもない農村出身の多くの人々にとっては、国内での単純労働に比べて、何倍もの収入を得られる「出稼ぎ」は大いなる魅力である。実際、報告者は今

回のフィールドワークの間、何人かの現地のベトナム人たちと話をすることがあったが、報告者の研究テーマに話が及ぶたび、彼ら・彼女らはかなりの関心を見せ、「あなたの研究はベトナムにとって、非常に有用であると思われる。なぜなら、ベトナムは貧しく、豊かになるために労働力輸出が必要だからである」というようなことを言われることも多かった。

また、書店の法律関係のコーナーに行くと、その一角を、労働力輸出に関連する法律についてのものが占めているほか、今回のフィールドワークにおいて収集した現地の新聞資料の中にも、労働力輸出に関連する記事が頻繁に見られ、なおかつ、それらの記事が大きな扱いを受けていることから関心の高さがうかがわれる。

次に、韓国の位置づけについてであるが、現在のベトナムにおいて、韓国企業の進出や、韓流ドラマの影響などで、韓国は人々にとって身近な存在となっている。労働力輸出の点でも、韓国は、高収入が期待される国として、頻繁にその名が挙がっており、その重要性は、やはり、高いといえよう。



写真 1. ベトナム国立図書館

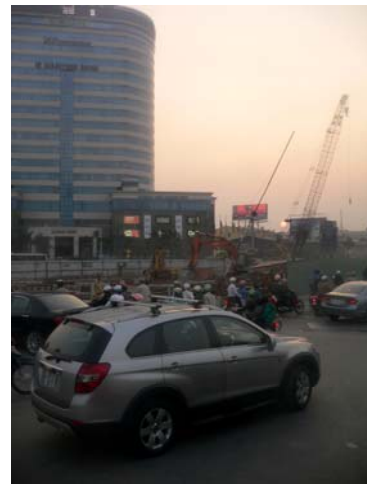


写真 2. ハノイの街並み

今後の展開・反省点

今回の派遣を踏まえて、博士予備論文へ向けての展開についてであるが、今回の派遣では、ハノイのベトナム国立図書館などにおいて、労働力輸出に関連する法律について書かれた文献や、現地の新聞資料の収集を行い、ある程度の成果を収めることができたので、今後は、今回の派遣で収集することのできた文献の解析を進め、それらを活かしながら、博士予備論文の執筆を行っていきたいと考えている。

しかしながら、今回の派遣で収集することのできた資料だけでは、今後博士予備論文を執筆するにあたって十分な量があるとは言えず、引き続き、現地での文献収集を行う必要性に迫られている。また、今回の派遣においては、労働・傷病兵・社会省 (MoLISA) 海外労働管理局 (DAFEL) などの政府系機関や労働力輸出企業を訪問して、文献収集などを行うことはできなかった。けれども、それらの機関への訪問も欠かせないと考えられるので、今後の課題としたい。



写真 3. 指導教員の先生と